

## Q2 どんな症状が現れるのですか？

### こんな症状はありませんか？

- ドロドロとした黄色や黄緑色の鼻水が出る
- 鼻づまりがある
- 鼻水がのどの奥に流れる
- 目の奥が痛い
- 頭が重い、頭痛がする
- 頬または額が痛い
- 匂いや味がわからない
- 鼻やのどが不快で安眠できない

気になる症状がある場合は、早めに耳鼻咽喉科を受診しましょう。



副鼻腔炎の特徴的な症状は、粘り気のある黄色や黄緑色をした鼻水と鼻づまりです。鼻づまりは鼻腔内の粘膜が腫れたり、鼻茸（ポリープ）ができたこと、鼻水はのど側に流れるようになり、後鼻漏（鼻水が鼻づまりがひどくなると、嗅覚・味覚障害、頭痛・頭重、頬や額の痛み、歯痛などが現れること）も起こります。また、気管支ぜんそくが起きたり、脳や目に重い合併症が起きたりすることもあります。

喉科を受診してください。耳鼻咽喉科では問診に続き、次のような検査を行います。

- ▼鼻の中を見る検査
- ▼鼻鏡で鼻の中を観察します。内視鏡検査も普及しています。
- ▼画像検査
- ▼エックス線検査やCT検査で、副鼻腔の粘膜の腫れや分泌物などがたまっていくかどうかを確認します。
- ▼その他の検査
- ▼炎症の程度を知るために血液検査を行います。また、症状により、嗅覚検査、細菌検査、鼻腔通気性検査などを行うこともあります。

### A 粘り気のある黄色い鼻水と鼻づまりが特徴です

教えて  
ドクター！



## 知っておきたい 健康相談室

治りにくいタイプが増加中

# 副鼻腔炎

鼻水や鼻づまり、匂いや味がわからないなどの症状が現れる副鼻腔炎。最初は軽い鼻風邪と思っても、鼻水や鼻づまりが長引き、副鼻腔炎と診断される人が少なくありません。しかも、近年は治りにくい種類の副鼻腔炎が増えています。



監修 仁保達夫

には・たつお  
大船耳鼻咽喉科クリニック院長  
札幌医科大学医学部卒業。横浜市の大学病院とその関連病院などでの20年間の経験を地域医療に生かすために、2020年2月クリニックを開業。幅広い世代の患者さんが気軽に相談できるクリニックを志し、日々診療を行っている。資格は日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医・指導医など。

## Q3 副鼻腔炎の治療法を教えてください。

### 難治性の 好酸球性副鼻腔炎とは？

副鼻腔炎は、白血球の好中球によるものが主体ですが、近年は治療をしても治りにくい好酸球による副鼻腔炎が増えています。国内での患者数は約2万人と推定されています。

#### 特徴

- ・成人以降に発症することが多い
- ・アレルギー的な過敏症がみられる
- ・鼻水が黄色く粘り気が強い
- ・鼻茸が多発して、両側の鼻づまりがひどい
- ・嗅覚障害が多い

なお、好酸球性副鼻腔炎は国の指定難病となっているため、認定基準を満たせば、医療費の助成を受けることができます。

まず局所療法と薬物治療を行い、改善されない場合は手術が検討されます。

- ▼局所療法
- 鼻水を吸引する「鼻処置」、鼻の中にノズルを差し込んで霧状の薬剤を吸い込む「ネブライザー療法」、鼻の中に麻酔をしたうえで、副鼻腔内を生理食塩水で洗う「副鼻腔洗浄」などがあります。
- ▼薬物療法
- 急性の場合はペニシリン系などの抗菌薬を短期間使用し、慢性の場合は粘膜の機能を活性化させる作用のあるマクロライド

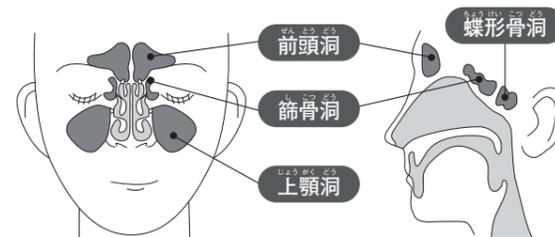
系抗菌薬を2〜3カ月かけて少量ずつ投与します。そのほか、鼻症状を改善するためにステロイド薬（点鼻薬）を、症状が急に悪化した時、鼻茸が多発した場合には、飲み薬のステロイド薬を使います。

- ▼手術
- 内視鏡を使った手術が一般的で、炎症を起こしている粘膜や鼻茸を取り除いたり、自然口を広げたりします。
- また、副鼻腔炎は歯のトラブルが原因で起こることがあり、その場合は歯科で治療を受けなければなりません。

### A 薬物療法では抗菌薬やステロイド薬などを使用

## Q1 副鼻腔炎とはどんな病気ですか？

### 副鼻腔はどこにあるの？



副鼻腔は4種類あり、それぞれ左右に1対ずつ、合計8個あります。

副鼻腔内は粘膜で覆われており、粘液と繊毛が侵入してきた異物（細菌やウイルスなど）を捕らえて排出します。ところが、粘膜が炎症を起こすと繊毛の働きが低下したり、副鼻腔と鼻腔をつなぐ穴（自然口）が詰まったりして、副鼻腔内の異物や粘液が排出されにくくなるのです。

### A 鼻の周囲にある空洞が炎症を起こす病気です

副鼻腔炎とは、鼻腔（鼻の中）と隣接する骨の中の空洞（副鼻腔）に炎症が起る病気です。副鼻腔は自然口という穴で鼻腔とつながっているため、外部から細菌やウイルスが侵入して感染したり、花粉やダニなどが侵入してアレルギー反応が起きたりして、粘膜に炎症が生じます。炎症が起ると副鼻腔内部の粘膜が厚くなったり、分泌物が多くなったりします。

症状が続く慢性副鼻腔炎に分けられます。

- ▼急性副鼻腔炎
- 多くは鼻風邪をきっかけに発症します。高齢者や抵抗力が低下しているなどの場合には、真菌（カビ）感染が起こることがあります。
- ▼慢性副鼻腔炎
- 蓄膿症と呼ばれることもあり、長期にわたる治療が必要となります。最近では、難治性の好酸球性副鼻腔炎（21ページ参照）が増えてきています。